



エネルギーを 築いた人々

“わが人生は闘争なり”の松永安左工門

—その6：安左工門の素顔に迫る—

松永を知るものは、「電力の鬼」「常識の尺度に合わない大人物」「頑固なじいさま」などと言う。なぜ、このように言われたのだろう。

電力業界をはじめ財界での奮闘、また茶人「耳庵」として知られ、さらに馬、相撲、水泳、山登りなど幅広く多くの趣味を持っていた。

今回は、あまりに知られていない趣味を通しての人生観、山登りからの人生観、遺言状、墓など、その素顔を紹介する。

趣味を通しての人生観

松永は趣味について「碁・将棋など座ってる勝負事は嫌いな性質だから、子どもの頃から跳ね回る方で、壱岐時代からやったのが相撲に乗馬。馬の方は、裸馬から始まって、埼玉県の柳瀬に隠棲した戦時中まで続けたから、かれこれ五十年になる。…村相撲の三役格だった自信で、大阪で石炭商をやっていた頃、近所にあった大阪相撲の湊部屋で、ざんぎり頭を相手にしてプロの強さを知ったこともある。一瞬のうちに全神経、全力を集中し相手を自己のペースに巻き込んで、勝つ方法を見つける真剣勝負のような相撲は、一面人生に通じるものがあるから、私は好きになる。

水泳も長く続けた。私の消夏法は涼しい山



登山姿の松永安左工門

荘に避けるとか、温泉で汗を消すのではなく、積極的に暑さを取り組むやり方で、夏は毎年、伊豆の堂ヶ島に行き、ここで泳ぐ。」

さらに「私の登山趣味というのは、頂上に登って荘厳な旭日を拝したり、漠々たる雲海の偉観を眺めたり、あるいは雪渓の美を賞したりする以外に、我々凡人が、何人も企て得なかつた一大難事をなし遂げ得たという快感を味わうにある。全く登山は人生の縮図であって、人間が一生かかっても味わい得られないような教訓を、わずかの短時日で体験することができるのである。」と述懐している。

「山登り」からの人生観

松永は、北アルプスよりも南アルプスを好んだ。その理由は、「人跡未踏の地であって、道という道もなくどこから踏み込んでいいか分からぬところが多く、水を求めるにも非

常に不便である。こういう厳しい山に危険を冒し最大甘苦と闘い、必ずやり通さずにはおかぬという確固たる信念を持って登りつめた時はあたかも人生のクライマックスを極めた

というような快感が悠然として起こって、なんとも喻えようもない心持がする。」と書いている。「山登り」には、北アルプスの初旅、唐松縦走記などが掲載されているが、ここでは、南アルプス縦走記(一部原文を修正)を簡単に報告する。

(1) 南アルプス縦走記

1925(大正14)年7月16日の夜に新宿駅を出発して、南アルプスの東岳、赤石岳などを目指した。

- ① 7月18日：甲斐の国・新倉の東力早川
社宅一駿河の国・大井川の上流・二軒小
屋一東岳の千枚沢の辺り(テント宿)
- ② 7月19日：千枚沢一大ガレ、予グレで
子馬大の「かもしか！」を見る一東岳頂上
の近くの清池(テント宿)
- ③ 7月20日：東岳(海拔：3146m)新石室
の建設

(石室地鎮祭での祝詞)

「東岳山頂北側に物好きな登山家のため
に石室を建設せんとす願わくはわれらの工
を竣へしめ何かの役に立たしめたまへその
代わり施主の名を以てこの台地を松永平と
称し頭領満之助に責任を負わしめるため石
室は満之助小屋と称せんす…」と唱え清水、
食塩、白米を供え祝詞をあげた。

{ 行く人の 雲と宿らん 石の室 }

東岳一荒川岳一赤石岳の頂上近き大聖寺
平(テント宿)

- ④ 7月21日：赤石岳頂上(海拔：3120m)
のご来光

「嘗て不二に登り、ご来光を拝した事の
ある予は、同じ一万尺以上の赤石山頂より、
不二そのものを対照として見ているので
ある。まさしく是日本一なるかなと感じた。
…若し天下一品のご来光を見んとなれば、
須らく赤石山頂のご来光を拝すべしである
と大提灯をともしておく…」

そして、石片を運び上げ、「山神」の二字

を刻して祠を設け、「國の鎮め人の世の安
らけきを祈り参らせんため大正十四年7月
21日我ら赤石山頂三角標の直後に石祠を
作りこれを祭るものなり」と祝詞をあげた。

{ 日の本の 沈めの祠 雪の峰 }

- ⑤ 7月22日：小渋の宿一大川原一伊那大
島駅一辰野駅一甲府駅
- ⑥ 7月23日：東京飯田町駅着(6:00)

(2) 松永安左衛門著「山登り」について

1928(昭和3)年に発行された松永安左衛門著「山登り」の本を名古屋鶴舞図書館で借り
ることができた。この本の最後に「財団法人
名古屋公衆図書館・昭和4年4月20日」・矢
田績氏(名古屋市東区樋木町貳丁目5番地)寄
贈と書かれていた。これを見つけた時、驚き
と共に感激した。ここに、矢田績の経歴を簡
単に紹介する。

矢田 繢

「1860(万延元)年～1940(昭和15)年」

紀州藩医、谷井家の2男として生まれ、
1878年、新宮藩家老・矢田家の養子となる。
1880(明治13)年に慶應義塾を卒業。
その後、時事新報社など幾多の企業
を経て三井銀行に入社した。1905(明治
38)年、名古屋支店長になり、豊田佐吉
など将来性を見込んだ人物・企業などへ
融資した。

銀行退職後の1922(大正11)年、名古屋に永住することを決め、自宅を開放し
経済人・文化人が集まり、当時、樋木クラブと呼ばれた。さらに、自費で名古屋
公衆図書館(現在・西図書館)を設立した。
彼が当初寄贈した蔵書は現在鶴舞図書館
で所蔵されている。まさに名古屋経済の
基礎を築くとともに名古屋に知的・文化を
根付かせた知識人である。なお、名古屋
西図書館2Fロビーに矢田績像がある。

松永の遺言状と墓

(1) 木川田一隆にあてた遺言状

松永が亡くなる10年前に、死に備えて遺書をしたためていた。その宛先は東京電力社長を務めた木川田一隆、養子の松永安太郎、中部電力社長を務めた井上五郎、横山通夫、田中精一の五人で、この大締めは池田勇人であった。

その内容は、

「一つ、死後の計らいの事、何度も申し置く通り、死後一切の葬儀、法要はうすくの出るほど嫌いに是あり。墓碑一切、法要一切が不要。線香類も嫌い。

死んで勲章位階(もとより誰もくれまいが、友人の政治家が勘違いで尽力する不心得かたく禁物)これはヘドが出るほど嫌いに候。財産はセガレ及び遺族に一切くれてはいかぬ。彼らがダラクするだけです。(衣類などカタミは親類と懇意の人に分けるべし。ステッキ類もしかり)

小田原邸宅、家、美術品、及び必要什器は一切、記念館に寄付する。これは何度も言った。

つまらぬものは僕と懇意の者や小田原従業者らに分かち与うべし。借金はないはずだ。戒名も要らぬ。以上昭和36年12月8日

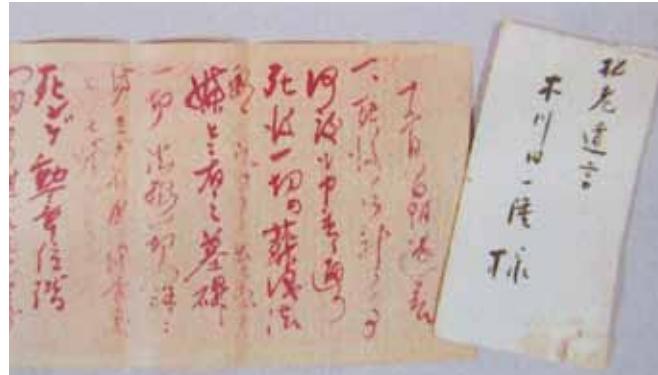
横山 通夫 様

松永安太郎 様

田中 精一 様

井上 五郎 様

木川田一隆 様



木川田一隆に宛てた遺言状

この大締めは池田勇人氏にお願いする。
以上」であった。

(2) お墓

1971(昭和46)年6月16日、慶應義塾病院で息を引き取った。遺言に従って葬儀・法要は行われず、小田原市の邸宅や美術品は市に寄付された。遺骨は、松永が戦中に住んだ柳瀬山荘近くにある平林寺に納められた。また、故郷・壱岐の墓にも分骨された。

(寺澤 安正)



平林寺の墓